

広報

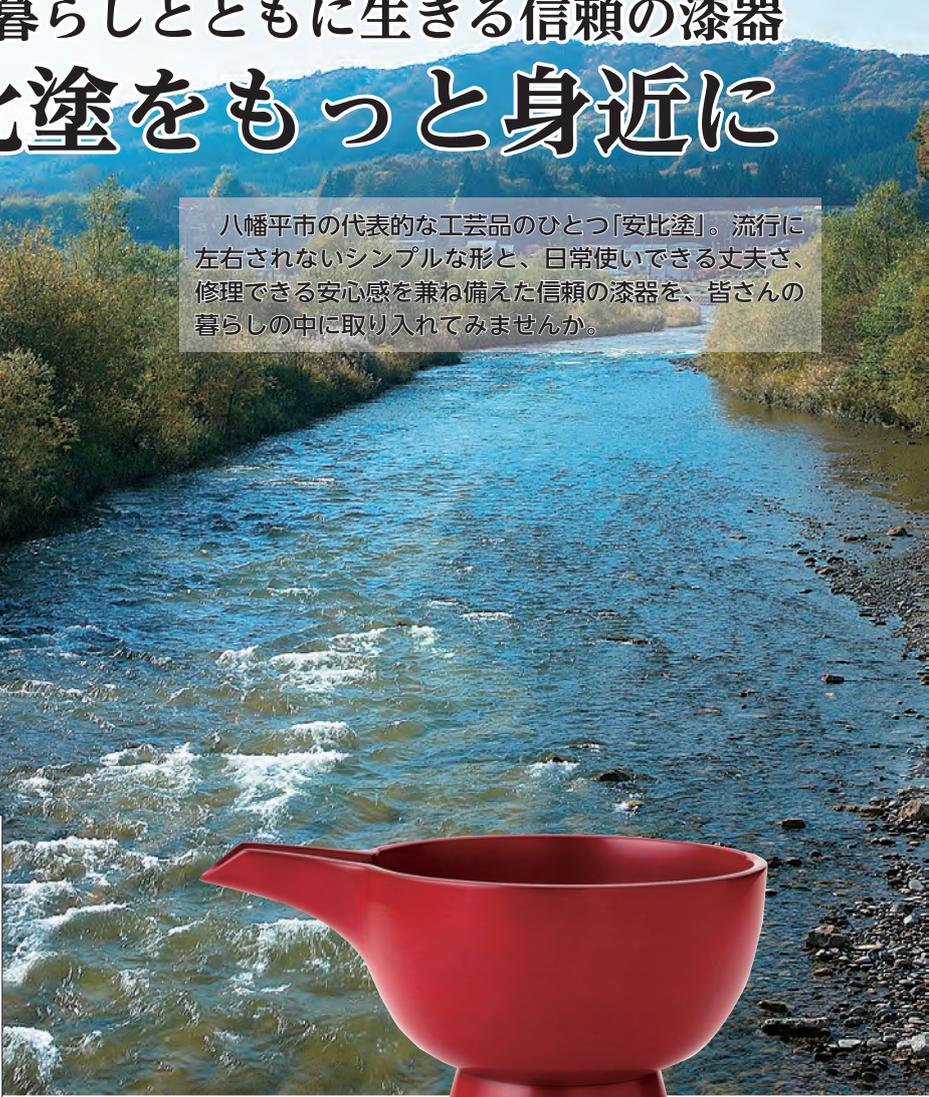
hachimantai
はちまんたい

3

Mar.2015
別冊

暮らしとともに生きる信頼の漆器 安比塗をもっと身近に

八幡平市の代表的な工芸品のひとつ「安比塗」。流行に左右されないシンプルな形と、日常使いできる丈夫さ、修理できる安心感を兼ね備えた信頼の漆器を、皆さんの暮らしの中に取り入れてみませんか。



八幡平黒谷地湿原を源流とする安比川

酒を杯に注ぐための伝統的な酒器「片口」。安比塗のロゴマークにもなっています

漆器産地「安比川流域」の歴史

八幡平黒谷地湿原を源流とし、馬淵川に注ぐ安比川。かつてこの流域では、豊富な森林資源を生かした漆器生産が盛んに行われていました。

その起源は古く、天台寺開創の際、僧侶が寺の食器として製作したものが広まったと伝わっています。冷涼で稲作に適さないこの一帯で、漆器作りは重要ななりわいであり、藩へ年貢の代わりに納められるほどでした。

安比川上流の細野地区で原木を切り出し、川を少し下った畑地区を中心に木地を生産。浄法寺で採れた漆を使い、浅沢地区を中心に塗りが行われていました。地元の市日では、漆器の取引も盛んで、鹿角街道を通じて各地へ広まっていきました。

明治期以降は荒沢漆器と呼ばれ、隆盛は昭和初期まで続きましたが、時代の変遷とともに瀬戸物やプラスチックが市場を席巻し、この地域の漆器生産は衰退していきました。

しかし、荒沢の漆器文化を後世へ伝えるため、昭和58年に安代町漆器センター(現・八幡平市安代漆工技術研究センター)を設立。伝統に新しい息吹を吹き込んだ「安比塗」として、現代の暮らしの中によりがえらせたのです。